

社会・経済思想史の古典の初版本を読む

—— T.ホッブズ、A.スミス、K.マルクス、J.M.ケインズ ——



関西学院大学経済学部

原田ゼミ3回生(第8期生)

川嶋和基(ゼミ長)・今津由美子・西田光輝・本多深眞・井上和俊

目次

はじめに (川嶋和基)	2
第1章 トマス・ホッブズ『リヴァイヤサン』初版、ロンドン、1651年 (今津由美子・西田光輝)	2
第2章 アダム・スミス『道徳感情論』初版、ロンドン、1759年 (川嶋和基)	18
第3章 アダム・スミス『国富論』初版、ロンドン、1776年 (本多深眞)	23
第4章 カール・マルクス『資本論』第1巻、初版、ハンプルク、1867年 (井上和俊)	29
第5章 ケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』初版、ロンドン、1936年 (本多深眞)	34
むすび (川嶋和基)	40
参考文献	41

はじめに

経済思想史の学びと、体験学習のアクティブラーニング型の授業とは交わることがないと考える人も多いだろう。体験学習を「実際の活動を通じて学ぶ学習形態」と定義するならば、思想をどのように現実・実際と結びつけるのかという疑問が生じる。この問いに対する答えが、「初版本」つまり過去の現実そのものに触れるという経験であった。

2024年度、原田ゼミの3回生(8期生)は、関西学院大学図書館の特別閲覧室を4度訪れ、稀覯本を閲覧した。つまり特別閲覧室ではホッブズ、スミス、マルクスの初版本に、さらに教授の研究室でケインズの著作に直接接触した。

1600年代(ホッブズ)から1700年代(スミス)と1800年代(マルクス)を経て1900年代(ケインズ)へと数百年の時を旅し・超えて、当時の人々と——当時アクティヴだった過去の人間たちと——同じ資料を用いて、その思想に直接接触する経験をしたのである。本稿では、社会・経済思想を学ぶ上で重要な彼らの思想を、5冊の初版本を通じて紹介し、より深い洞察を得ることを目的とする。

各章は学部サイトの原田ゼミのコーナーにすでに記事として出ているが、1つにまとめたのが本論文である。写真の掲載は、サイト記事の際に関学図書館から貴重図書・古文書資料画像利用許可を得ている。ただし、素人がスマホで撮影したので、お見苦しい場合はお許しいただきたい。

(川嶋和基)

第1章 トマス・ホブズ『リヴァイアサン』初版、ロンドン、1651年

2024年10月21日、本学図書館所蔵の貴重図書トマス・ホブズ『リヴァイアサン』の初版本（ロンドン、1651年）をその偽版2点とともに計2点、特別閲覧室にて閲覧・講読した。



写真1:ホブズ『リヴァイアサン』(ロンドン1651、真正版)と原田ゼミ一同

『リヴァイアサン』初版とその偽版について

『リヴァイアサン』には初版とされるものが3つ存在することが知られている。正しい初版(真正版)のヘッド版と、その偽版(海賊版)のベアー版とオーナメント版である。これらは表題・刊行年・出版社名を変えずに出されているため、それぞれの表題ページの下にある挿絵の相違でもって区別される。つまり、挿絵がそれぞれ、人の頭(Head)、熊(Bear)、複数の花束(Ornaments)となっているのが違うのであり、その挿絵からヘッド版・ベアー版・オーナメント版と呼ぶのである。

『リヴァイアサン』は、当時の絶対的な通念となっていた王権神授説によって王権を正当化する国家観を転換させた内容のため、とくに1660年の王政復古の時代に無神論として批判され異端思想とされて、イングランドでの再販が禁じられた。しかしその衝撃の大きさと歴史的価値のため、偽版を作るモチベーションが生じたのである。

今回、関学が所蔵する初版のそれらを比較して挿絵の相違から真贋を確かめるとともに、その有名な個所をヘッド版でもって厳密に見た。

① ヘッド版(真正版)

写真 2:『リヴァイアサン』初版(ロンドン、1651年)、ヘッド版つまり真正版、扉絵。

主権者の体が無数の人々のひしめき合いによって作られているのが分かる。



LEVIATHAN,
OR
The Matter, Forme, & Power
OF A
COMMON-WEALTH
ECCLESIASTICALL
AND
CIVILL.

By THOMAS HOBBS *of* Malmesbury.



LONDON,
Printed for ANDREW CROOKE, at the Green Dragon
in St. Pauls Church-yard, 1651.



写真 3:ヘッド版の表題ページとその挿絵、人の頭が分かる。

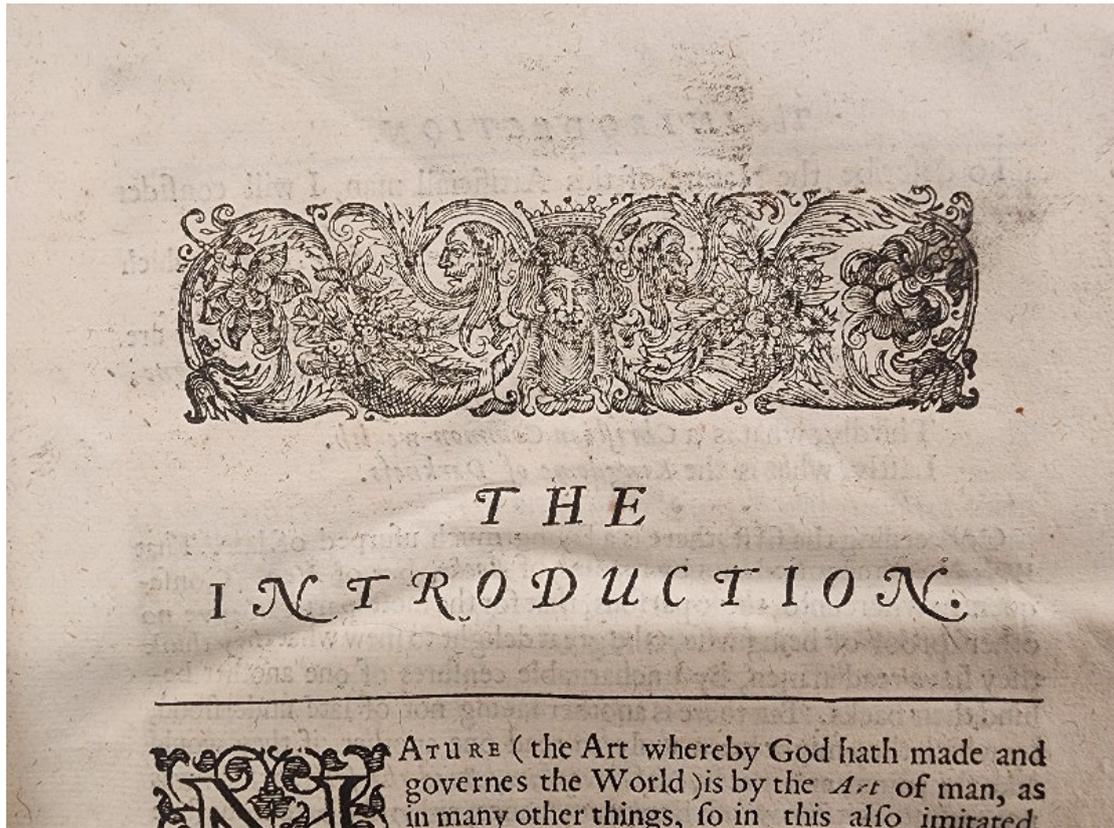


写真4: ヘッド版、「序説」冒頭の挿絵、ここにも人の顔がある。

② ベアー版(偽版の1つめ)

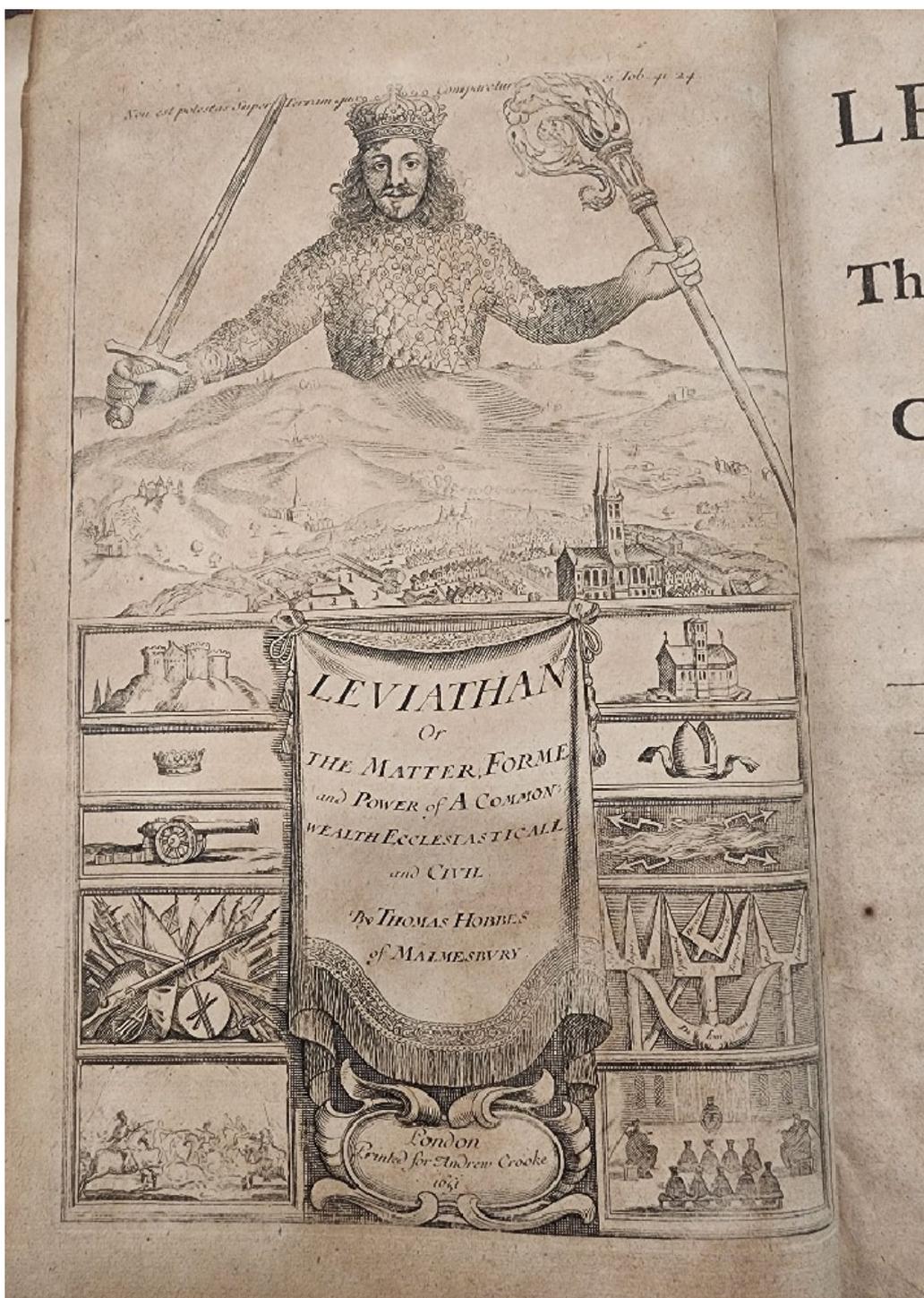


写真5:ベアー版。ロンドン 1651 年となっているが、実際には真正版刊行直後にオランダで印刷(関西学院大学 1997, 目次前の写真解説を参照)。この場合、絵は、主権者の体や山などが緻密ではない。

LEVIATHAN,
OR
The Matter, Forme, & Power
OF A
COMMON-WEALTH
ECCLESIASTICALL
AND
CIVILL.

By THOMAS HOBBS *of* Malmesbury.



LONDON,
Printed for ANDREW CROOKE, at the Green Dragon
in St. Pauls Church-yard, 1651.

写真 6: ベアー版、表題ページ挿絵、熊が植物を握っているのが分かる。

③ オーナメント版(偽版の2つめ)

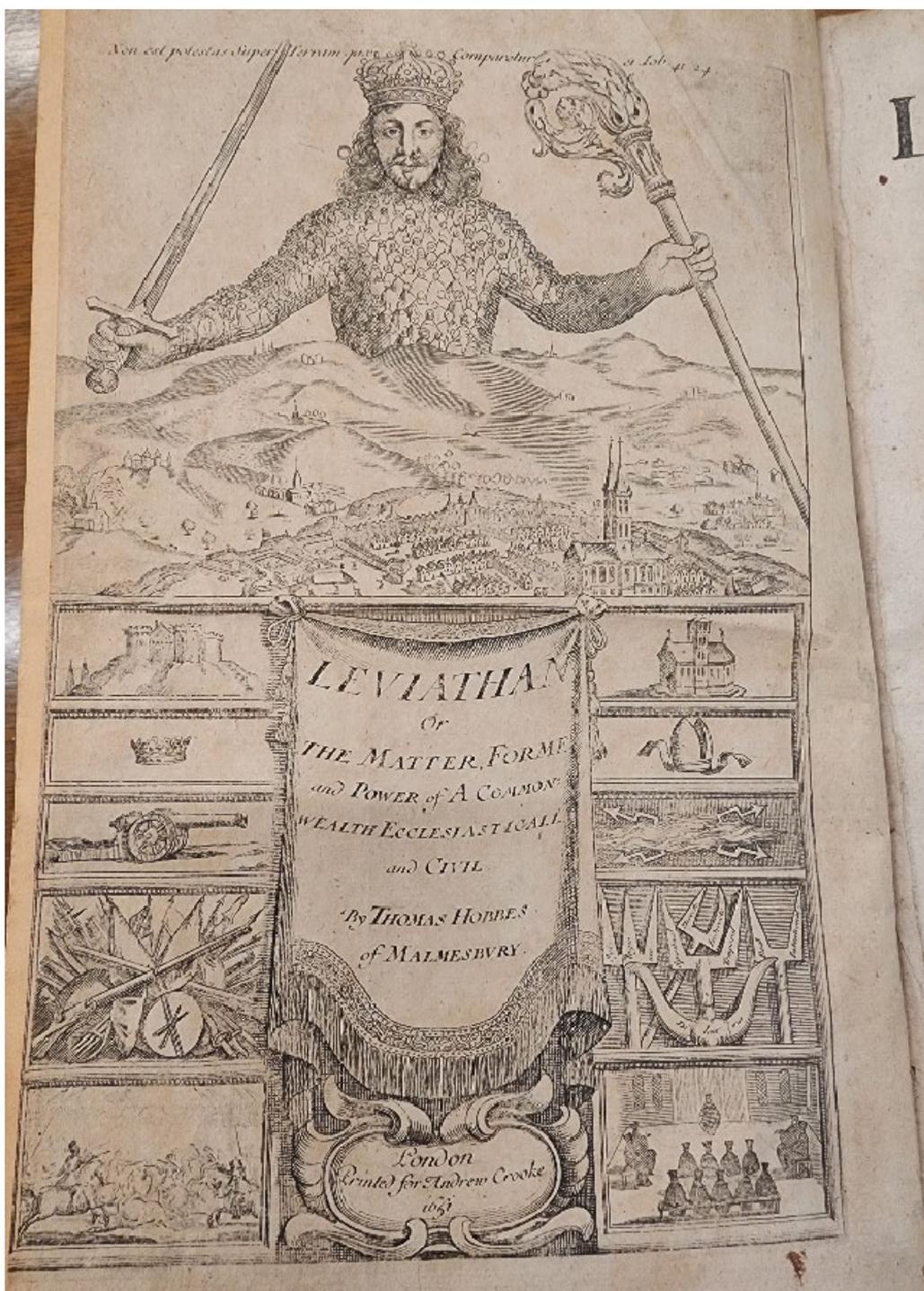


写真7: オーナメント版。ロンドン 1651 年となっているが、実際には 1880 年頃ロンドンで印刷

(関西学院大学 1997、巻頭挿絵解説を参照)。この絵も真正版ほど緻密ではない。

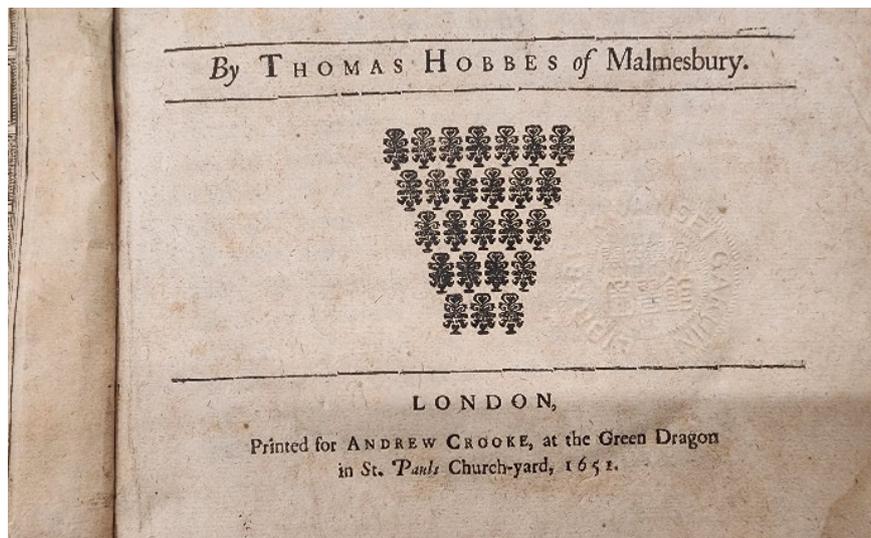
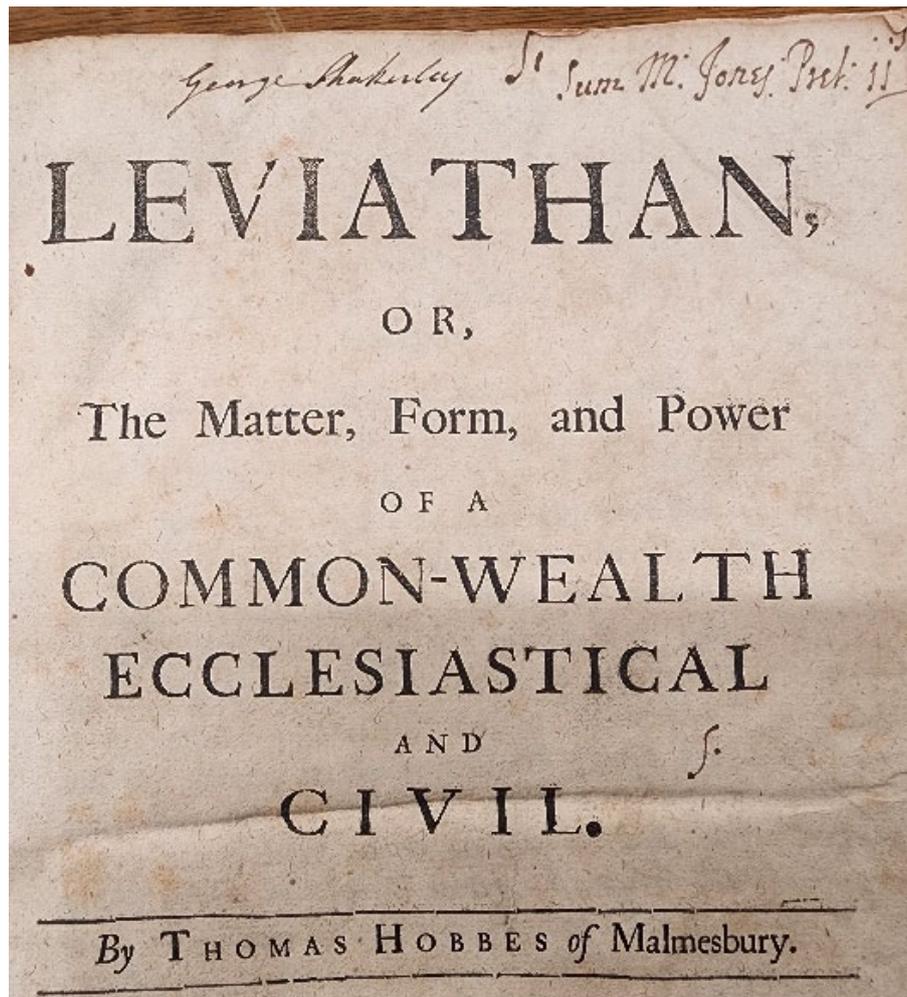


写真 8: オーナメント版、表題ページ挿絵、25 の花束が分かる。



写真 9: 関学図書館所蔵オーナメント版の見返し部分に張られている、以前の所有者の蔵書票。”Richard Hopton” と書かれているようである。

平等な人間たちの自己保存を目的とした、相互の戦争状態を避けるための国家

では、真正版(ヘッド版)でもって『リヴァイアサン』の内容を見ていこう。

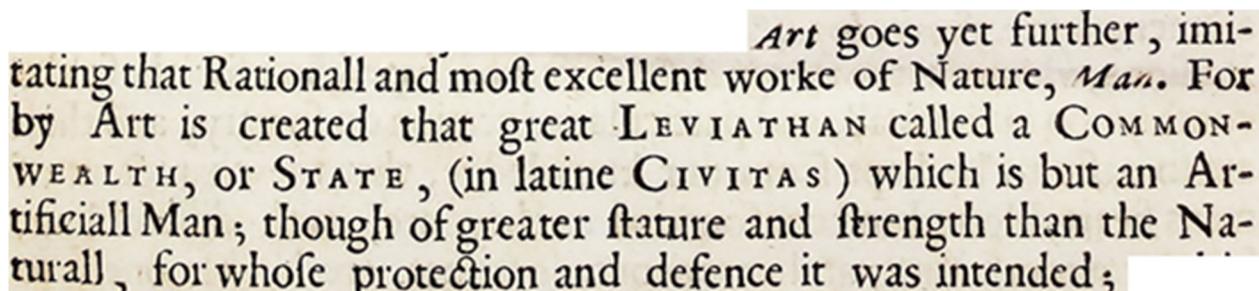


写真 10:真正版 p.1

写真 10 は、「序説」の部分である。写真 10 の 4~6 行めの訳は「ただしそれは、自然の人間よりも形が大きくて力が強いのであって、自然の人間を保護し防衛するためにそれは意図されている。」(水田訳 I, p.37)とあるように、ホッブズは各人が持つ自己保存権、その行使の権利を委譲された国家(共同機関)を、『旧約聖書』に出てくる海に住む巨大な怪獣「リヴァイアサン」にたとえている。そしてその国家・政府が人間の「生きる」権利つまり生存権を守ると唱えている。

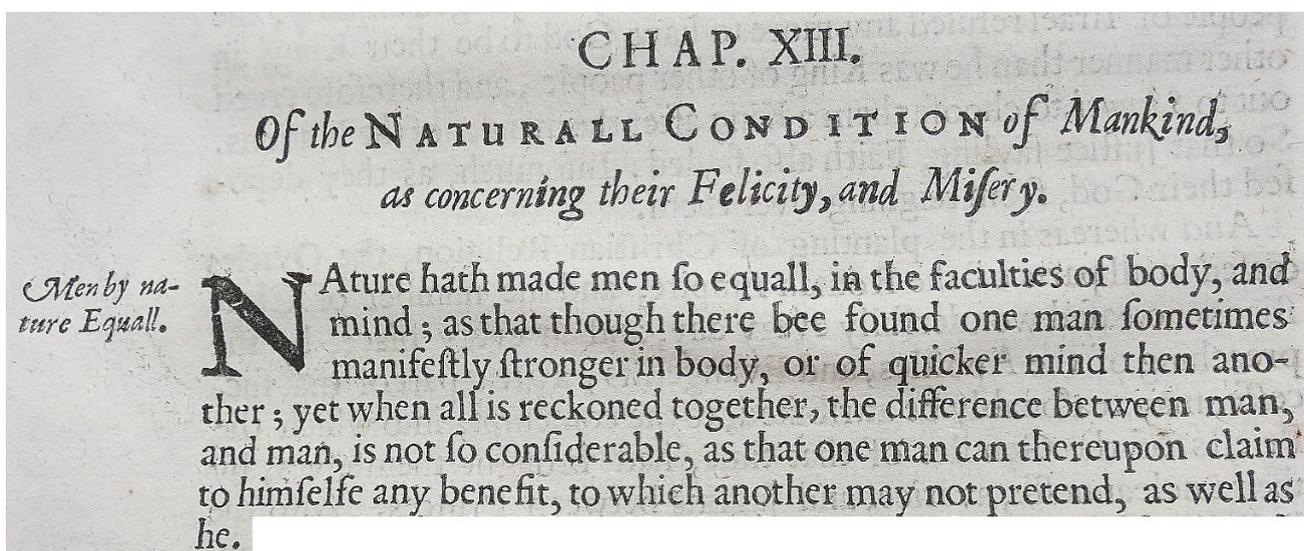


写真 11:真正版 p. 60

写真 11 は「第 13 章 人類の至福と悲惨に関する、人類の自然状態について」からの抜粋であり、冒頭は「自然は人々を、体 body と心 mind の諸能力において次のように平等に作った」から始まる。ポイントとなるのが、写真 2 の左に書かれているホッブズ自身による段落要約であ

る "Men by nature Equall" つまり「人々は生まれながらに平等である」(水田訳 I, p.207)という主張である。戦乱のこの時代(1600年代中頃!)にすでにホッブズが人間は平等であると唱えたことは、驚くべきことである。

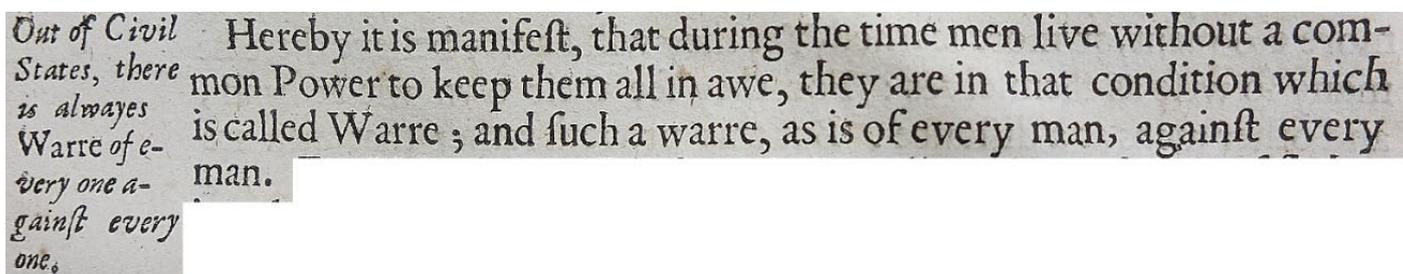


写真 12: 真正版 p.62、下はその左側の拡大

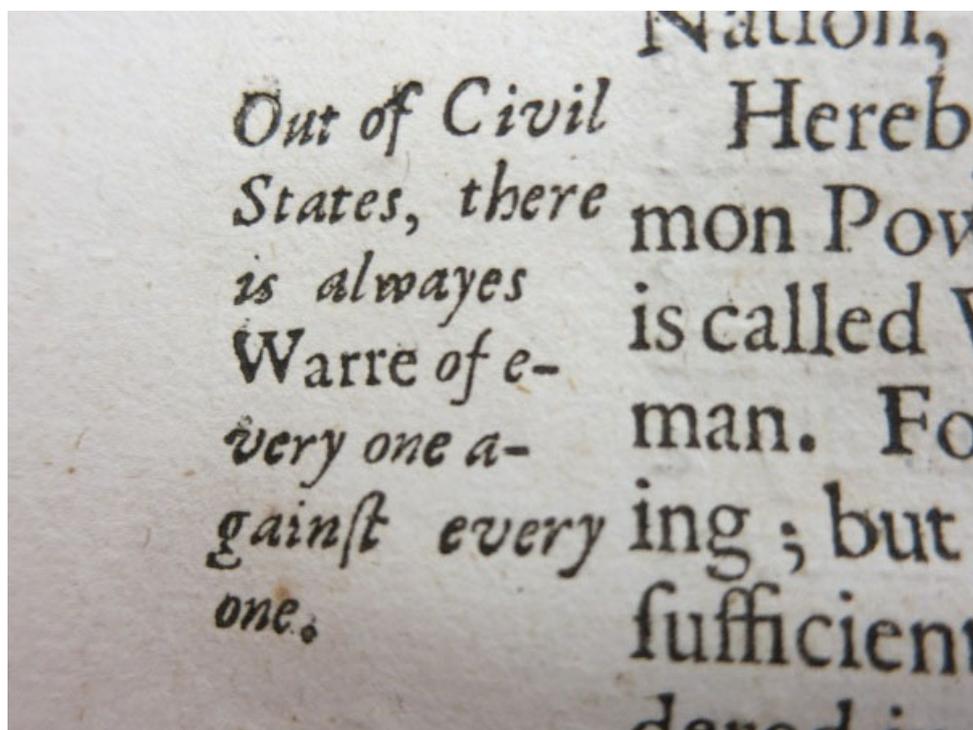


写真 12 上では、左側の要約に有名な言葉があるので、それをよく見るために拡大したのが写真 12 下である。

“Out of Civil States, there is always Waare of every one against every one”つまり「市民状態以外であれば、そこにはいつも各人の各人に対する戦争があるのだ」(水田訳 I, p.210)が彼自身の要約として書かれている。自然権としての生存権を行使する人同士では、それを求める各

人の中で奪い合いの戦争が生じ、各人の生存権を保障するためにそれを統括する組織、国家や政府が必要であるとホップズは考えたのである。この論理でもって、王権神授説は乗り越えられた。つまり、今日の国家の観念が生まれたのである。

補足——3つの版の挿絵を比較して気になること

この記事を終える前に、『リヴァイアサン』初版の真正版と偽版2つの計3つの版を比較して気になったことを、閲覧の記録として記しておきたい。

① 扉絵

本学が所蔵する2つの偽版つまりベアー版(写真5)・オーナメント版(写真7)の扉絵はディテールがかなり酷似している。つまり両偽版同士では、主権者リヴァイアサンの像本体の表情は微差を感じる程度である。しかし両者をヘッド版(写真2)と比べると、真正版であるヘッド版の方がやはりよく描き込まれていることが一目瞭然である。

ヘッド版扉絵下部(写真2)、旗の両脇の10コマにモチーフが描かれているが、何を描こうとしたのか明確で輪郭や影が写実的である。一方で偽版2点(写真5、7)は、同じモチーフを描いているにはいるが、あくまでヘッド版のイラストを模しただけで実物感に欠ける印象を受ける。ヘッド版リヴァイアサン像本体(写真2)は、手の表情や持ち物の細部はもちろん、身体を構成する数多の人々までしっかり手の込んだ描き込みがされている。また、印刷も濃くはっきりとしており、品質もともなっていると感じる。

① 表題ページ挿絵

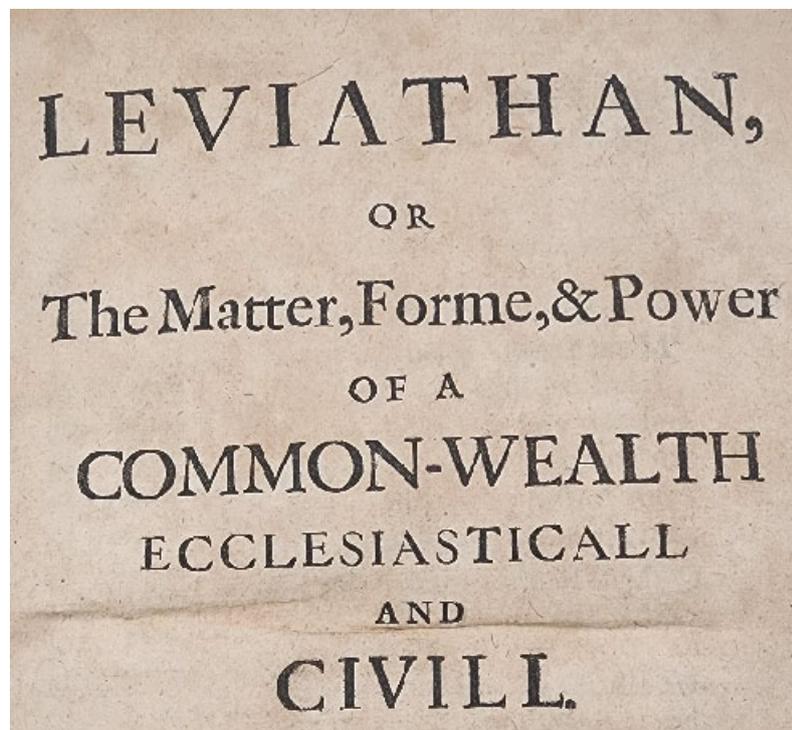
通説の通り、実際に3種全く異なる絵が挿入されていることを観察した(写真3、写真6、写真8)。とくに挿絵全体の大きさや豪華さはその本の真偽には関係ないようである(ヘッド版の挿絵が一番小さい)。

② 表題ページのスペル

表題ページで明確に違ったのが、ページ上部、タイトル及び副題の英文の綴りである。以下は該当箇所の写真と文字の書き起こしである。差異の部分に太字・下線にした。

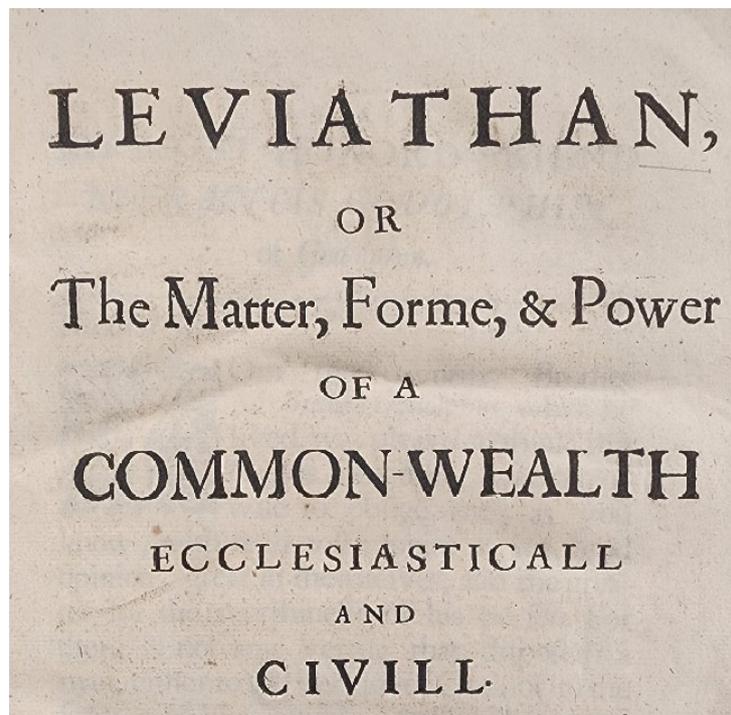
ヘッド(真正)版: LEVIATHAN, OR The Matter, Forme¹, & Power OF A COMMON-

¹ Form に e がついている　オーナメント版では Form。



WEALTH ECCLESIASTICALL² AND CIVILL³. (写真3)

ペアー版: LEVIATHAN, OR The Matter, Forme, & Power OF A COMMON-WEALTH



² ECCLESIASTICALL の末尾の L が 2 つ オーナメント版では 1 つ。

³ CIVILL の末尾の L が 2 つ オーナメント版では 1 つ。

ECCLESIASTICALL AND CIVILL. (写真6) つまり、ヘッド版とベアー版は同じである。

次に、同じ個所をオーナメント版で見てみよう。

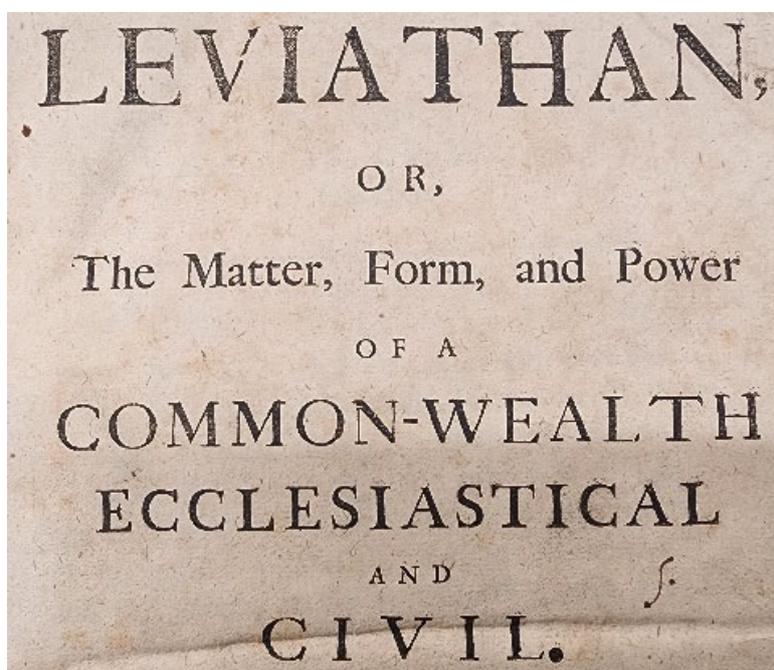


写真8：オーナメント版、表題ページ

オーナメント版： LEVIATHAN, OR, The Matter, Form, and Power OF A COMMON-WEALTH ECCLESIASTICAL AND CIVIL. (写真8)

つまり、OR のあとにコンマがある。ヘッド版ベアー版にはそれがなかった。ヘッド版・ベアー版での Frome から e が落ち、現代の綴りと同じである。オーナメント版では Power の前で and が表記されているが、ヘッド版・ベアー版では記号で & と表記されていたのである。その他、オーナメント版では ECCLESIASTICALL から L が1つ落ち、現代に見られる綴りと同様の形になっている。また CIVILL からも L が1つ落ち、現代と同じである。

ヘッド版とベアー版には違いが見られず、この両者で使用されている英単語の綴りは今日使用されるものと比べ(とくに単語の末尾が)違っている。オーナメント版はヘッド版ベアー版に比べて異なる綴りが使用されており、ここで説明した違いが見られた。この表記ゆれは、ヘッド版・ベアー版に比べ出版年数がオーナメント版のみ遅く、だから比較的新しい時代の綴り方を採用したことが原因と考えられる。その意味では、やはり2つの偽版のなかでも、ベアー版は1651年のヘッド版(真正版)刊行後ほどなく出されたとされるのに対して、オーナメント版は——ロンドン1651年と書かれてはいるが——実際には1680年頃ロンドンで印刷されたと言われていることが(関西学院大学1997、巻頭挿絵解説参照)ここに表れていると言えよう。それにしても、その間に英語というものが発展したということになる。ただ、絵に関して言えば、オーナメント版の

絵もベアー版と同じく、ヘッド版(真正版)ほど緻密ではない。

ただし、今回の比較はこの表題ページの綴りと挿絵についてのみ3つの版の相違を確認しているが、本文そのものについては行なっていない。その他、「ほんものの初版とみられる1[ヘッド版(真正版)]のなかにも、異版があるのではないかとおもわれる。[…]できるだけ多くの初版本を比較してみるか」(水田訳 I、p.6 での水田による「例言」)と言われるように、『リヴァイアサン』はここで扱った3版のほか、ヘッド版(真正版)のみでも数々の異刷があることが判明している(川又 2014、p.38-39、松波 2023、p. 67-68 も参照)。今回鑑賞したものは、“THE” はイタリック体だが、ここがローマン体のももあるようだ(高野 2015、p. 5 参照。これらについては Sakiya ARAKAWA も参考にした)。関学図書館には、じつはヘッド版もさらに2冊(合計3冊)あるので、私たちは複数のヘッド版同士を比較することもできるという好条件に恵まれている。今後こうした作業にも挑戦していきたい。

(今津由美子・西田光輝)

第2章 アダム・スミス『道徳感情論』初版、ロンドン、1759年

2024年4月29日、大学図書館の特別閲覧室にて、所蔵の貴重図書であるアダム・スミス『道徳感情論』(1759年)の初版本を閲覧した。



写真1: スミス『道徳感情論』(初版、1759年)と原田ゼミ3回生一同

T H E
T H E O R Y
O F
M O R A L S E N T I M E N T S .

BY ADAM SMITH,
PROFESSOR of MORAL PHILOSOPHY in the
Univerfity of GLASGOW.



L O N D O N :
Printed for A. MILLAR, in the STRAND ;
And A. KINCAID and J. BELL, in EDINBURGH.
M D C C L I X .

写真2: タイトルページ

写真2は『道徳感情論 The Theory of Moral Sentiments 』のタイトルページである。当時の「道徳 Moral」とは社会を生きていく人間の行為の規則の全体(生きていくために必要な生産・交換も含めた人間の社会関係全般に関する規則)を意味したから、「道徳感情」の理論とは、現在で言う社会心理学の側面から、自分の利益の追求を出発点とする近代的個人がそれなりに(誰にも命令されずに)自己規制しながら他人との社会関係を作りうるかを説明した。中世の神学的な哲学では個人の「利己心」からは社会秩序はできないと言われてきたのに対して、それが可能であるとした。

ちなみに、下部の“M DCC LIX”は、Mが1000、Dが500、Cが100、Lが50、IXが9を表しており、この本が1759年に出版された、ということも読み取れる。

「公正な観察者」「自愛心」「富・名誉・出世を求める競争」

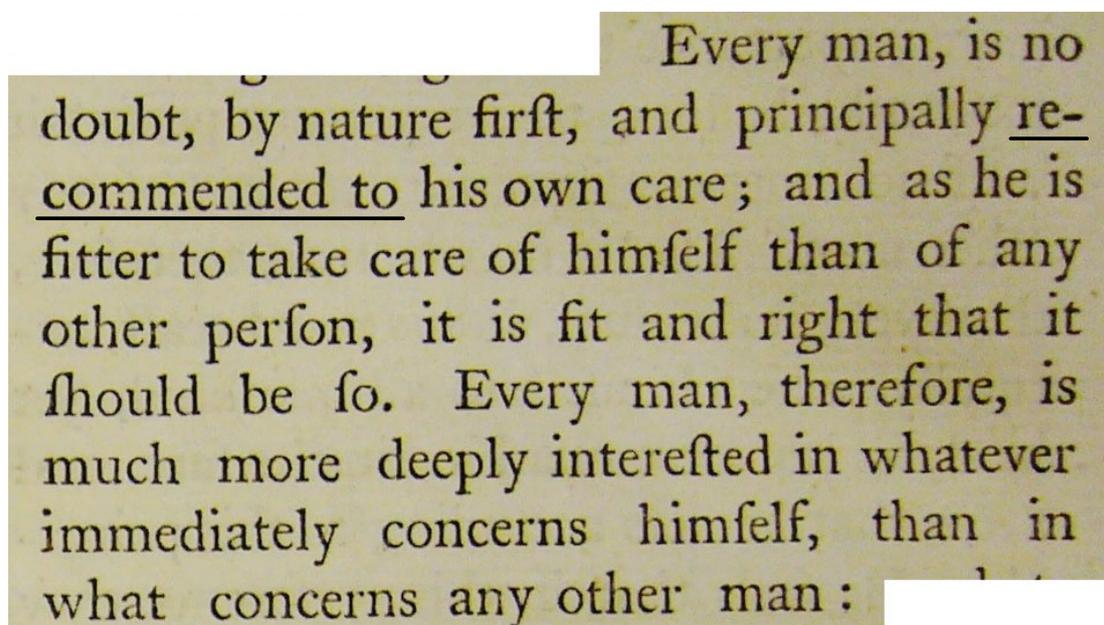


写真3: 初版、p.181(水田訳(上)p.216)。ただし、下線は各筆者による(以下も同じ)。

写真3は、人間の利己心・自愛心の正当性についての記述の抜粋である。上から2-3行目の“recommend to~”という表現は「~に託す、委ねる」という意味であり、現在の一部辞書では出てこないほどの古い表現である。ここでは、スミスの代表的な思想の1つである「自己利益の追求」について記されており、本書の重要ポイントといっても過言ではないだろう。

When he views himself in the light in which he is conscious that others will view him, he sees that to them he is but one of the multitude in no respect better than any other in it. If he would act so as that the impartial spectator may enter into the principles of his conduct, which is what of all things he has the greatest desire to do, he must, upon this, as upon all other occasions, humble the arrogance of his self-love, and bring it down to something which other men can go along with.

写真4： 初版、p.182(水田訳(上)p.217)

写真4は、人間は「利己心 self-love」(自愛心)に基づいて行為するのであるが、誰でも「大衆 multitude」の一人でしかないわけで、自分自身で「公正な観察者 impartial spectator」に監視されているかのように意識して、他人の同感を得ることができる程度に行為を自己規制している、とスミスが論じている箇所である。「利己心」を出発点とするのは当然だが、過度な「傲慢さ arrogance」にまでなっていれば、自身でそれを「抑え humble」しなければならない。言い換えると、自分の利益の追求を出発点とする近代的個人がそれなりに(誰にも命令されずに)自己抑制しながら他の人との社会関係を作りうるかを具体的に述べている箇所であり、ここも本書の重要ポイントである。

In the race for wealth, and honours, and preferments, he may run as hard as he can, and strain every nerve and every muscle, in order to outstrip all his competitors. But if he should juggle, or throw down any of them, the indulgence of the spectators is entirely at an end. It is a violation of fair play, which they cannot admit of. This man is to them, in every respect, as good as he: they do not enter into that self-love by which he prefers himself so much to this other, and cannot go along with the motive from which he hurt him. They readily, therefore, sympathize with the natural resentment of the injured, and the offender becomes the object of their hatred and indignation.

写真5： 初版、p.182(水田訳(上)p.217-218)

写真5は、端的にまとめると、自由競争がフェアプレーでなされるように、複数の「観察者たち spectators」が——写真4では単数で「公正な観察者」であるが——「競争者たち competitors」の様々な行為を見るチェック機能についての記述である。ちなみに、行為がどの程度まで許されるかという基準は、「観察者たち」が「フェアプレーの侵犯 violation of fair play」を認めないなかで、つまり「観察者たち」が被害者の当然の怒りに「同感する sympathize」なかで、言うならば、近代的個人相互のやり取りのなかで、社会的な「良心 conscience」(他の箇所)として形成される(さらに「良心」は法・法律へ)。スミスの言う「道徳」は、既存の伝統的な道徳を前提としてはいないのである。

(川嶋和基)

第3章 アダム・スミス『国富論』初版、ロンドン、1776年

2024年5月13日、大学図書館の特別閲覧室にて、貴重図書として所蔵されているアダム・スミス『国富論』(1776年)の初版を閲覧した。『国富論』の初版は大判で2冊分になっている(以下、第1分冊をⅠ、第2分冊をⅡと記載)。



写真1: スミス『国富論』(初版、1776年)と原田ゼミ3回生一同

AN
I N Q U I R Y
I N T O T H E
Nature and Causes
OF THE
WEALTH OF NATIONS.
By ADAM SMITH, LL. D. and F. R. S.
Formerly Professor of Moral Philosophy in the University of GLASGOW.
IN TWO VOLUMES.
VOL. I.

L O N D O N :
PRINTED FOR W. STRAHAN; AND T. CADELL, IN THE STRAND.
MDCCLXXVI.

写真2: 初版 I のタイトルページ

「年々の労働」「自然価格」「見えない手に導かれて」

INTRODUCTION AND PLAN OF THE WORK.

THE annual labour of every nation is the fund which originally supplies it with all the necessaries and conveniencies of life which it annually consumes, and which consist always, either in the immediate produce of that labour, or in what is purchased with that produce from other nations.

写真3: 「序文および本書の構想」初版 I、p.1(水田・杉山訳(一)p.19)

写真3は『国富論』の最初の「序文および本書の構想」である。

「すべての国民の年々の労働は、その国民が年々消費する生活の必需品や便益品のすべてをその国民に供給する、もともとの原資であって、それらのものはつねに、その労働の直接の生産物であるか、あるいはその生産物で他の諸国民から購入されるものである」

写真4: 初版 I、p.70(水田・杉山訳(一)p.108)

THE natural price, therefore, is, as it were, the central price, to which the prices of all commodities are continually gravitating. Different accidents may sometimes keep them suspended a good deal above it, and sometimes force them down even somewhat below it. But whatever may be the obstacles which hinder them from settling in this center of repose and continuance, they are constantly tending towards it.

写真4の訳は「したがって自然価格は、いわば、すべての商品の価格をたえず引き寄せる中心価格である。様々な偶然が価格を自然価格よりもずっと高く吊り上げておくこともあろうし、それよりもいづらか引き下げることもさへあるだろう。しかし、価格がこの静止と持続の中心に落ち着くのを妨げる障害が何であろうとも、価格はたえずこの中心に向かっているのである。」

EVERY individual is continually exerting himself to find out the most advantageous employment for whatever capital he can command. It is his own advantage, indeed, and not that of the society, which he has in view. But the study of his own advantage naturally, or rather necessarily leads him to prefer that employment which is most advantageous to the society.

写真5: 初版 I、p.32(水田・杉山訳(二)p.300)

写真5の訳は「どの個人も、自分の自由になる資本がどれほどであろうと、そのためのもっとも有利な仕事を見いだそうと、たえずつとめている。彼の眼中にあるのは、まさに彼自身の利益であって、その社会の利益ではない。しかし彼自身の利益の追求が自然に、あるいはむしろ必然的に、その社会にとってもっとも有利であるような仕事を彼に選ばせるのである。」

この文章からは公共のためにとかより良い社会をするためにとかよりも結局、自分の利益追求こそが社会に良いというなんとも言えないような文章が個人的に興味深かった。アダム・スミスなりの自己愛の優先を主張する文章であると解釈した。

BUT the annual revenue of every society is always precisely equal to the exchangeable value of the whole annual produce of its industry, or rather is precisely the same thing with that exchangeable value. As every individual, therefore, endeavours as much as he can both to employ his capital in the support of domestick industry, and so to direct that industry that its produce may be of the greatest value; every individual necessarily labours to render the annual revenue of the society as great as he can. He generally, indeed, neither intends to promote the publick interest, nor knows how much he is promoting it. By preferring the support of domestick to that of foreign industry he intends only his own security; and by directing that industry in such a manner as its produce may be of the greatest value, he intends only his own gain, and he is in this, as in many other cases, led by an invifible hand to promote an end which was no part of his intention. Nor is it always the worse for the society that it was no part of it. By pursuing his own interest he frequently promotes that of the society more effectually than when he really intends to promote it. I have never known much good done by those who affected to trade for the publick good. It is an affectation, indeed, not very common among merchants, and very few words need be employed in dissuading them from it.

写真6: 初版Ⅱ、p.35(水田・杉山訳(二)p.303-304)

写真6は重要な段落なのでその全体を示すが、10行目の“By preferring”からの訳は次のようになる。

「国外の勤労よりは国内の勤労を支えることを選ぶことによって、彼はただ彼自身の安全だけを意図しているのであり、またその勤労を、その生産物が最大の価値をもつようなしかたで方向づけることによって、彼はただ彼自身の儲けだけを意図しているのである。そして彼はこのばあいにも、他の多くのばあいと同様に、見えない手に導かれて、彼の意図のなかにまったくなかった目的を推進するようになるのである。またそれが彼の意図のなかにまったくなかったということは、必ずしも常に社会にとってそれだけ悪いわけではない。自分自身の利益を追求することによって、彼はしばしば、実際に社会の利益を推進しようとするばあいよりも効果的に、それを推進する。公共の利益のために仕事をするなどと気どっている人びとによって、あまり大きな利益が実現され

た例を私はまったく知らない。たしかにそういう気どりは、商人たちのあいだであまりよくあることではなく、彼らを説得してそれをやめさせるには、ごくわずかな言葉しかつかう必要はないのである。」

ここに有名な「見えない手」があった！それに続く文章(下線部)はアダム・スミスなりの尖った発言が見られ、他者への愛よりも自己の利益追求に従い、この自己愛を使うことで結果的に市場を通じてみな利益が得られるという考えが見られる。

(本多深真)

第4章 カール・マルクス『資本論』第1巻、初版、ハンブルク、1867年

6月10日、大学図書館の特別閲覧室においてカール・マルクス『資本論』第1巻、初版(1867年)を閲覧した。

実際に初版本を見るにあたり、私はカール・マルクス(1818～83年)という人物を調べ、翻訳の『資本論』を読んだ。結論から言うと、私がイメージしていた内容とかなり違った本であった。読むまでは社会主義の良さを沢山書いている本だと思っていたが、実際には資本主義の不平等性・問題性を指摘したいわば分析本と言える本である。ただ、私だけでなくカール・マルクスと言えば社会主義で『資本論』と繋げてイメージする人は多いのではないだろうか。



写真1: マルクス『資本論』第1巻(初版、1867年)と原田ゼミ3回生一同



写真2: 初版のタイトルページ

これが『資本論』第1巻の初版である。“Kapital”はドイツ語で「資本」という意味である。そして、中性名詞なので前に定冠詞“das”が付いている。なので、直訳すれば「資本」または「資本というもの」であって、必ずしも「資本論」という訳にはならないことが、この表紙から読み取れる。紙はかなり古くなっており、触れるときは皆かなり注意して触れた。もちろんドイツ語で書かれているのだが、現在と同じ言葉でも綴り方が今と違う部分もあった。その例が上記の写真の副題である。現代ドイツ語では「経済」を“Ökonomie”と綴るが、ここでは“Oekonomie”と書かれている。

「商品の分析」「可変資本」「剰余価値」

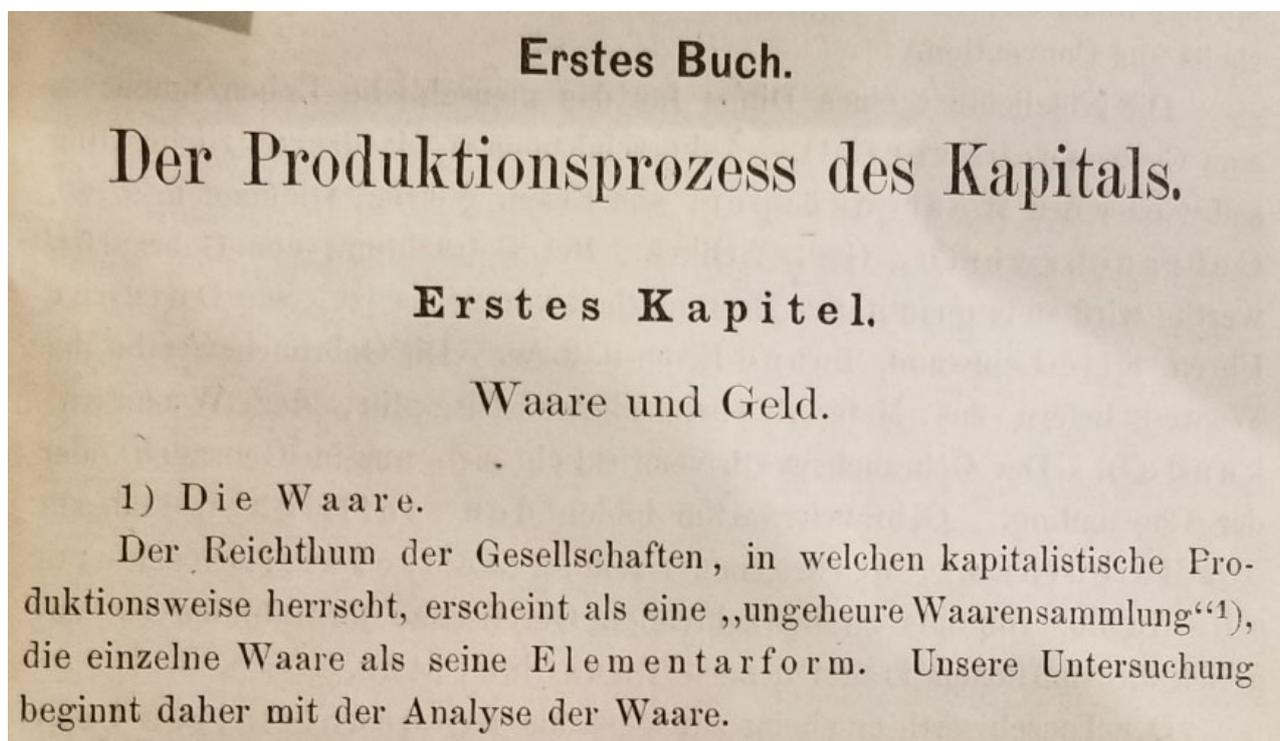


写真3: 初版、p.1(今村・三島・鈴木訳(上)p.75)

写真3が『資本論』第1巻初版の1ページ目である。第1篇「資本の生産過程 Der Produktionsprozess des Kapitals」の第1章「商品と貨幣 Waare und Geld」である。

マルクスそして『資本論』において何はともあれ重要だとされるのが、この最初の1段落にある商品の位置づけである。マルクスは、資本主義社会で社会の富は「膨大な商品の集合 ungeheure Waarensammlung」として——しかも個々の商品はその「基本形態 Elementarform」として——姿を現すので、我々の研究は「商品の分析 Analyse der Waare」から始まる、と言って議論を始めている。この文章で“ungeheure”という「巨大な」「ムチャクチャ大きい」という表現で資本主義社会での商品の威力・波及の凄さが強調されている。初版のここを見て、マルクスが分析対象として商品に執着していることが感じられた。

Gebrauchswerth des verkauften Oels dem Oelhändler. Der Geldbesitzer hat den Tageswerth der Arbeitskraft gezahlt; ihm gehört daher ihr Gebrauch während des Tages, die tagelange Arbeit. Der Umstand, dass die tägliche Erhaltung der Arbeitskraft nur einen halben Arbeitstag kostet, obgleich die Arbeitskraft einen ganzen Tag wirken, arbeiten kann, ~~dass daher der Werth, den ihr Gebrauch während eines Tags schafft, doppelt so gross ist als ihr eigener Tageswerth,~~ ist ein besonderes Glück für den Käufer, aber durchaus kein Unrecht gegen den Verkäufer.

Unser Kapitalist hat den Casus vorgesehen. Der Arbeiter findet daher in der Werkstätte die nöthigen Produktionsmittel nicht nur für einen sechsständigen, sondern für einen zwölfständigen Arbeitsprozess. Saugten 10 lbs. Baumwolle 6 Arbeitsstunden ein und verwandelten sich in 10 lbs. Garn, so werden 20 lbs. Baumwolle 12 Arbeitsstunden einsaugen und in 20 lbs. Garn verwandelt. Betrachten wir das Produkt des verlänger-

写真4: 初版、p.160(今村・三島・鈴木訳(上)p.358)

heraus, dessen Werth = $c + v + m$, wo m der Mehrwerth, z. B.
 $\overset{c}{\underbrace{\quad}} + \overset{v}{\underbrace{\quad}} + \overset{m}{\underbrace{\quad}}$
 410 l. + 90 l. + 90 l. Das ursprüngliche Kapital C hat sich in C' ver-

写真5: 初版、p.179(今村・三島・鈴木訳(上)p.389)

写真4と写真5は、労働力の価値について説明している文章である。これらの文章を通して分かることは、労働とそれへの報酬・賃金についてのマルクスの考えである。

写真4の6～7行目にかけての文章 “dass daher der Werth, den ihr Gebrauch während eines Tages schafft, dopplet so gross ist als ihr eigener Tageswerth”を訳すと「労働力を1日使用することで生み出される価値はしたがって、その労働力自体の日価値[1日あたりの賃金]の2倍に相当すること」である。「貨幣所有者 Geldbesitzer」が支払っている賃金は労働者が生み出す価値のたった半分にはすぎず、残りが剰余価値として搾取されている、と説くマルクスの真骨頂が

ここにある。

写真5では、「剰余価値 Mehrwerth」が計算式で示されていて、原料・材料・機械消耗分である「固定資本 c」と、労働力である「可変資本 v」を投下して生産するとすれば、生産過程で“v”がさらに「剰余価値 m」を生み出すことを示している。「410 ポンド」の固定資本と「90 ポンド」の可変資本を投下して生産するとすれば、可変資本はその価値を生み出すのみならず、それに加えてさらに「90 ポンド」生み出しているのである。単なる概念だけでなく計算式で説明している点に、マルクスの議論が経済学と言える所以があるのではないだろうか。そして、この考え方でもって資本主義においては労働者が搾取されているので、富を全体に分配できる社会主義への移行は当然である、という考えにつながっていくことは、容易に推測できる。

Durch Verlängerung des Arbeitstags producirten Mehrwerth
nenne ich absoluten Mehrwerth; den Mehrwerth dagegen, der aus
Verkürzung der nothwendigen Arbeitszeit und entsprechender Ver-
änderung im Grössenverhältniss der beiden Bestandtheile des Ar-
beitstags entspringt, — relativen Mehrwerth.

写真6: 初版、p.295(今村・三島・鈴木訳(上)p.580)

写真6には、マルクスを語る上で欠かせない言葉が見られる。「絶対的剰余価値 absoluten Mehrwerth」と「相対的剰余価値 relativen Mehrwerth」という、資本家が労働者の生み出す剰余価値をさらに増やすための2つの方法が示されているからである。1日の労働時間つまり「労働日 Arbeitstags」を「延長すること Verlängerung」で剰余価値そのものを外延的に増やす「絶対的剰余価値」と、賃金を減らすことで1日の同じ総労働時間の中で剰余労働時間部分を増やす「相対的剰余価値」という2種の剰余価値増大の方法が資本家にはある、とマルクスは考えた。この2つは、マルクスが資本家による労働者の搾取の構造を言葉として示している点で非常に重要である。

(井上和俊)

第5章 ジョン・メイナード・ケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』初版、ロンドン、1936年

2024年11月11日、ジョン・メイナード・ケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』(1936年)の初版を閲覧した。

初版本は1冊本で、出版が1900年代なので貸出可能だったので、原田教授の研究室にて講読した。



写真1: J.M.ケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』(初版、1936年)と原田ゼミ3回生一同

J.M.ケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』の初版に触れる

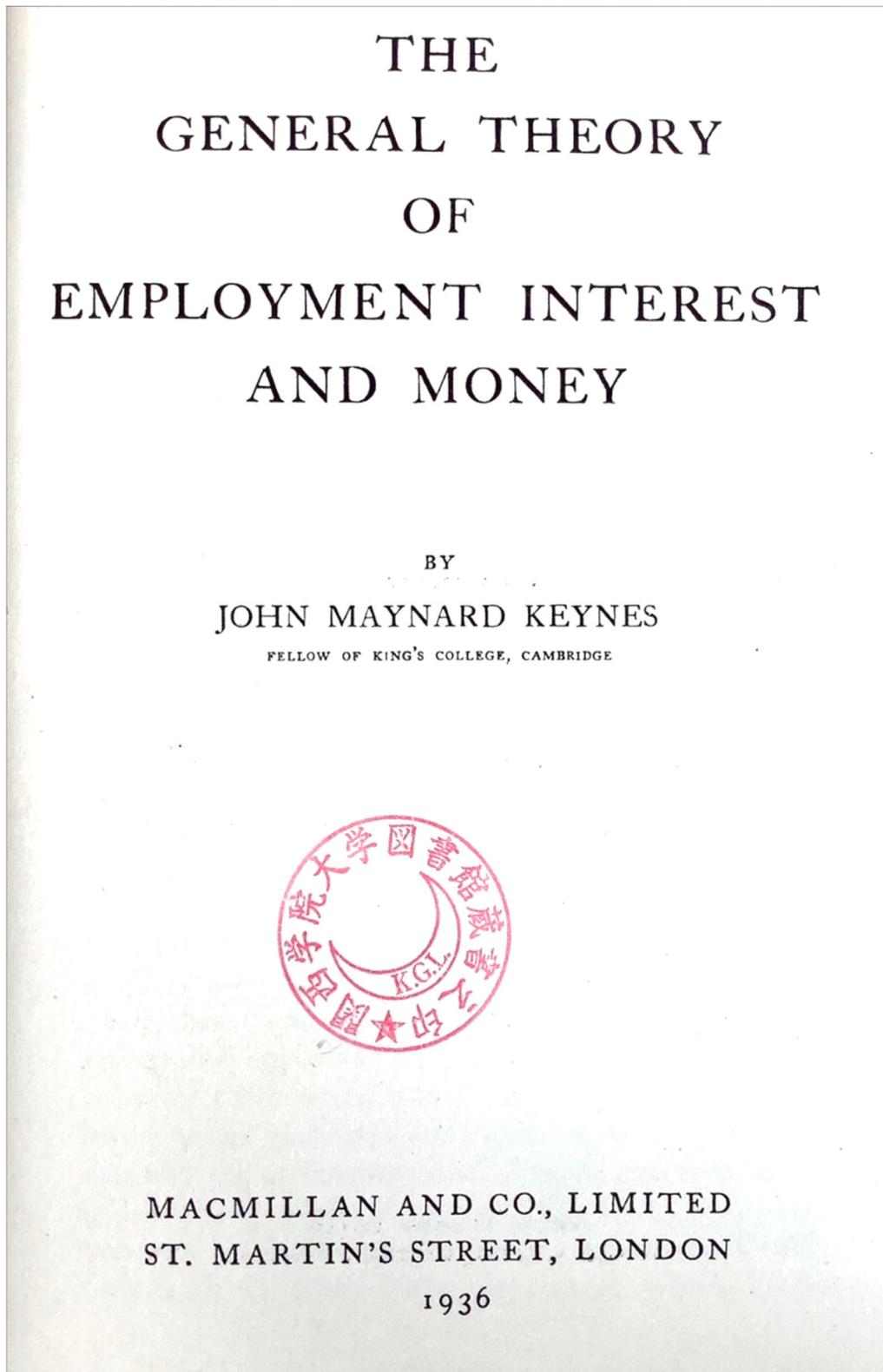


写真2:初版のタイトルページ

I shall argue that the postulates of the classical theory are applicable to a special case only and not to the general case, the situation which it assumes being a limiting point of the possible positions of equilibrium. Moreover, the characteristics of the special case assumed by the classical theory happen not to be those of the economic society in which we actually live, with the result that its teaching is misleading and disastrous if we attempt to apply it to the facts of experience.

写真3:「序文」 初版、p.3

写真3は『雇用・利子および貨幣の一般理論』の「序文」である。

「私は、古典派理論の諸公準が一つの特殊な場合にのみ当てはまり、一般的な場合には当てはまらないということを論じようと思う。なぜなら、古典派理論が想定している状態は、多くの可能な均衡状態の中の一つの極限点にすぎないからである。そればかりでなく、古典派理論が想定する特殊な場合の特徴は、われわれが現実生活中に生活している経済社会の特徴とは異なっており、もしわれわれがその教義を経験の事実当てはめようとするれば、人を誤り導き、災害をもたらす結果となるのである。」(塩野谷訳p.3)

この「序文」でケインズは、古典派経済学に対して現実の経済に適さない特殊な理論であるとして批判し、新たな視点の必要性を強調している。「誤り導き、災害をもたらす」という表現から、ケインズが新しい理論を唱えることになった世界恐慌で失業問題などがなかなか解決しない社会背景があり、理論の誤用が現実社会に深刻な影響を与えるという強い警告が伝わる。この序文は、従来の枠組みを覆し新たな理論を提示する彼の革新的な意志を感じさせる。

The celebrated *optimism* of traditional economic theory, which has led to economists being looked upon as *Candides*, who, having left this world for the cultivation of their gardens, teach that all is for the best in the best of all possible worlds provided we will let well alone, is also to be traced, I think, to their having neglected to take account of the drag on prosperity which can be exercised by an insufficiency of effective demand.

写真4:第2章「古典派経済学の想定」 初版、p.33

写真4は「古典派経済学の想定」に関する記述である。

「伝統的経済理論の名高い楽天主義のおかげで、経済学者は、あたかも現世から逃避して自分の畑の耕作に明け暮れ、すべては放任しておけば、ありとあらゆる世界の中の最善の世界において、最善の結果になると教えるカンディードに似ているとみられてきたが、その楽天主義もまた、繁栄に対する障害が有効需要の不足によって起こりうるということを彼らが考慮しなかったことに由来すると思われる。」(塩野谷訳p.34)

この章では、伝統的経済理論の楽天主義が有効需要の不足を無視し、現実の経済問題を見落としているとの批判を展開している。人々が自分の一番得意なことに集中して自分の利潤を利己的に追求することで万人にとっていちばんよい結果が出る、といったアダム・スミスの市場の取引に基づいて、政府は経済に介入するべきではないという姿勢(=放任すれば最善)は、経済停滞への対応を誤らせる危険があると警告して、理論を現実在即して再構築する必要性を訴えている。

It is also obvious from the above that the employment of a given number of men on public works will (on the assumptions made) have a much larger effect on aggregate employment at a time when there is severe unemployment, than it will have later on when full employment is approached.

写真5:初版、第10章「限界消費性向と乗数」p.127

写真5は「限界消費性向と乗数」について述べられている。

「また上述のことから、公共事業における一定人数の雇用は、(上記の想定のもとでは)激しい失業のある場合の方が、のちになって完全雇用に接近した場合よりも、総雇用量に対してはるかに大きな効果を及ぼすことは明らかである」(塩野谷訳p.125)

つまり、公共事業による雇用創出が、特に失業が深刻な状況下では、総雇用に対して大きな効果を持つことを示していて、経済が完全雇用に近づくにつれて、その効果が限定的になることを意味しており、政策のタイミングや状況への適応が重要であることを示唆していると考えられる。このケインズの視点は、失業問題を解決するための積極的な介入の必要性を強調しており、経済政策の実効性を考える上で重要な洞察を与えているといえる。

For my own part I am now somewhat sceptical of the success of a merely monetary policy directed towards influencing the rate of interest. I expect to see the State, which is in a position to calculate the marginal efficiency of capital-goods on long views and on the basis of the general social advantage, taking an ever greater responsibility for directly organising investment;

写真6:初版、第12章「長期的期待」p.164

写真6の訳は「私自身としては、現在、利子率に影響を及ぼそうとする単なる貨幣政策が成功するかどうかについていささか疑いをもっている。私は、資本財の限界効率を長期的な観点から、一般的・社会的利益を基礎にして計算することのできる国家が、投資を直接に組織するために今後ますます大きな責任を負うようになることを期待している」(塩野谷訳p.162)

ここでケインズは、貨幣政策の限界を認識し、国家が長期的視点で投資を組織する重要性を強調している。資本財の効率を社会全体の利益に基づいて評価し、公共投資を計画的に推進することで、経済の安定と成長を目指すべきだと主張している。

law did not hold. For in that case an increase of investment, however small, would set moving a cumulative increase of effective demand until a position of full

employment had been reached; while a decrease of investment would set moving a cumulative decrease of effective demand until no one at all was employed.

写真7:初版、第18章「雇用の一般理論再説」p.164-165

写真7の訳は「なぜなら、その場合には、投資がどんなにわずかに増大しただけでも、完全雇用状態に到達するまで有効需要の累積的増大が引き起こされるだろうし、他方、投資が減少すると、だれも雇用されなくなる状態まで有効需要の累積的減少が引き起こされるからである。」(塩野谷訳p.250)

ここでは、有効需要が投資の変化に大きく依存することを強調されている。投資がわずかに増

えるだけで完全雇用に向けて需要が累積的に増加する一方、減少すれば失業が広がる危険があると指摘している、この考えは投資の調整が経済全体に与える影響の大きさを示しており、投資を安定させる政策の重要性が訴えられている。

We have shown that when effective demand is deficient there is under-employment of labour in the sense that there are men unemployed who would be willing to work at less than the existing real wage. Consequently, as effective demand increases, employment increases, though at a real wage equal to or less than the existing one, until a point comes at which there is no surplus of labour available at the then existing real wage;

写真8:初版、第20章「雇用関数」p.164-165

写真8の訳は「われわれは先に、有効需要が不足している場合には、現行の実質賃金以下においても喜んで働こうと欲する人々が失業しているという意味で、労働の過少雇用が存在するということを明らかにした。したがって、有効需要が増加すれば、それにつれて現行の実質賃金に等しいか、あるいはそれ以下の実質賃金のもとにおいても雇用は増加し、ついにはその時の実質賃金で利用可能な余剰労働がまったく存在しない点に到達する。」(塩野谷訳p.288)

上記の訳からも分かる通り、ケインズは有効需要の不足が失業の原因であり、賃金の高さだけが問題ではないと指摘している。有効需要が増えれば、賃金が一定でも雇用は拡大し、余剰労働が解消されると述べ、需要喚起の重要性を強調している。

(本多深真)

むすび

実際に『リヴァイアサン』初版(1651年)をはじめとする経済・社会思想の初版本に触れる機会を得たことは、我々にとって非常に貴重な経験であった。稀覯本の持つ独特の匂いや手触り、装丁の細部に至るまで、書物そのものが持つ歴史性を五感で感じ取ることができた。特に、『国富論』初版(1776年)や『資本論』初版(1867年)を目の当たりにすることで、単に書物の内容を学ぶだけでなく、それが生み出された当時の時代背景や著者の思想をより身近に感じることができた。また、書物を通じたこのような直接的な体験は、固定観念を打破し、新たな視点を得る契機となった。

さらに、J.M.ケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』の初版を観察することで、アダム・スミスやマルクスといった過去の経済思想家と比較しながら、時代ごとの理論の発展と変遷を実感することができた。ケインズの理論が従来の経済学を乗り越え、新たな政策を生み出したことを考えると、書物の物質的側面に触れることが、思想の流れをより深く理解する助けとなることが明らかになった。

本研究を通じて、実際に歴史的な書物に触れることの価値、思想分野における体験学習の有効性を再認識することができた。今後も、単に書かれた内容を読むだけでなく、その物質的な存在としての書物にも目を向け、思想の形成と継承のあり方を考察し続けることが重要であるといえよう。

(川嶋和基)

参考文献 (苗字・団体名で 50 音順。初版本それ自体は入れていない)

- ・Sakiya Arakawa (荒川幸也)「まだ先行研究で消費してるの？」
<https://sakiya1989.hatenablog.com/entry/2020/12/19/215512>
- ・今村仁司『『資本論 第 1 巻』解説』、上掲、今村・三島・鈴木訳『資本論』(下)所収、2024 年。
- ・梅田百合香「ホブズ 政治と宗教——『リヴァイアサン』再考」、名古屋大学出版会、2005 年。
- ・関西学院大学図書館『特別コレクション目録——トマス・ホブズ著作文庫、イギリス社会政策コレクション、イギリス社会科学古典資料コレクション』、関西学院大学、1997 年。
- ・川又祐「ホブズ『リヴァイアサン』初版 Head 版(一六五一年)の異刷について」、『政経研究』第 51 巻、第 1 号、2014 年、p. 33-50。
https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/political/political_51_1.html
- ・ジョン・メイナード・ケインズ(塩野谷祐一訳)『雇用・利子および貨幣の一般理論』(『ケインズ全集』第 7 巻)、東洋経済新報社、1983 年。
- ・ニコラス・クリスタキス(鬼澤忍、塩原通緒訳)「ブループリント——「よい未来」を築くための進化論と人類史(下)」、株式会社ニューズピックス、2020 年、p. 250。
<https://nagoya.repo.nii.ac.jp/records/21891>
- ・アダム・スミス(水田洋訳)『道徳感情論』(上)・(下)、岩波書店 2003 年。
- ・アダム・スミス(水田洋監訳・杉山忠平訳)『国富論』全 4 冊、岩波書店、2000-01 年。
- ・高野彰「トマス・ワレン——『リヴァイアサン』(ヘッド版)の印刷者」、『名古屋大学附属図書館研究年報』第 13 号、2016 年(『研究年報』にはページ数が不記載)。
- ・ラウル・ペック(監督)『マルクス・エンゲルス』大月書店、2018 年。
- ・ホブズ、T.(水田洋訳)『リヴァイアサン』全 4 冊、岩波書店、1992-2014 年。
- ・松波京子「トマス・ホブズ『リヴァイアサン』(1651 年)初版 Head 版の比較検討——透かし模様(watermark)を中心として」、『名古屋大学附属図書館研究年報』第 20 号、2023 年、p. 59-70。
<https://nagoya.repo.nii.ac.jp/records/2005246>
- ・カール・マルクス(今村仁司・三島憲一・鈴木直訳)『資本論』(上)・(下)、筑摩書房 2024 年。
- ・水田洋『アダム・スミス——自由主義とは何か』講談社、1997 年。